東北のチカラ

地域を守り、未来を創る建設業

気候変動で大規模な自然災害が増加している現在、安全で安心な暮らしを守るインフラの整備が重要になっている。災害発生時の対応を含め、プロジェクトの最前線で活動する技術者は不可欠な存在。特に東北では震災後の復旧事業や災害対応が進められ、多くの建設技術者が先頭に立ち地域の安全を守ってきた。現場で活躍する技術者たちは専門知識を生かしながら、地域社会に貢献するという強い使命感も抱いている。災害復旧現場で何を思い、どう対処したのか――。建設技術者の奮闘を紹介する。



秋田・子吉川堤防決壊緊急復旧

迅速に仮堤防完成、二次災害を回避

秋田県を流れる1級河川子吉川では、24年7月24日からの記録的な大雨でレベル5の氾濫が発生した。子吉川と支川の石沢川では7カ所で堤防が決壊し、流域に浸水被害をもたらした。緊急事態に河川管理者と地元の建設会社は昼夜連続で緊急対応。決壊から1週間ほどで仮復旧を完了した。東北地方整備局秋田河川国道事務所などと災害協定を結ぶ秋田県建設業協会は総力を結集し、地域のインフラや住民の安全確保に全力で挑んだ。地元を洪水から守る思いを胸に秘め必死の努力で迅速な対応を実現した。

秋田河川国道事務所子吉川出張所で待機していた三浦亘喜さんは、氾濫危険水位を超えた子吉川の状況を維持管理企業から随時報告を受け、点検結果を同事務所に伝える役目を担っていた。堤防決壊の一報が入った時、出張所には緊張感が走った。三浦さんは入省4年目、初めての水害対応だった。

決壊後、地元建設会社は24時間体制で堤防の緊急復旧工事に当たった。三浦さんも連絡調整などの役割を担い、動揺を抑えながら対応した。「机上では学べない復旧過程を間近で見守ることができた」ことで、災害に直面した現場では「スピードが求められる」と学んだ。「地元のために」と公務員として地域に貢献する道を選び、その意義を強く感じた瞬間だった。「災害対応のスキルを高めつつ、さまざまな経験を積みながら成長していきたい」と思いを新たにする。

緊急復旧作業を担当した村岡建設工業の佐藤涼斗さんは、決壊した堤防を見て愕然とした。工事車両が入れる道路も流され、当初の工程が変更になった。先輩技術者の指示を受けつつ自分なりに考え、どう動くかを現場で実践した。25台のダンプトラックを一気に投入し、1日で1200立方㍍の土砂を搬入する作業は通常の同規模工事ではあり得ない。緊急事態に直面し協力会社も力をフルに発揮してくれた。着実に進んでいく復旧現場。災害の最前線で奮闘しながら、佐藤さんは「災害時のスキームが確立されている」と、改めて地域建設業の底力を実感した。

普通科の高校に通っていたが建設業の仕事に興味を持ち、卒業後は足場の会社に入社した。その後、村岡建設工業に転職。ものづくりの楽しさは「職場の連帯感」と「達成感」と話す。「目標とする先輩技術者のように後輩を指導できる立場に早くなれるよう、しっかり仕事に向き合っていきたい」と力強く話す。

鳥海ダム工事事務所に所属する菅原慎也さんは、現場対応チームの一員として、緊急復旧工事の施工写真を撮影したり、作業の進捗状況を収集したりなど後方支援を担当した。「現場で一番頑張っているのは地元建設会社の方々。地域住民の安全や安心を支える重要な役割を果たしている。その姿が広く伝わるような写真を撮るよう心掛けた」という。災害対応では「第一線で働く建設会社にストレスを与えず、スムーズに仕事ができるようにする」ことに気を配った。高校生の時、成瀬ダムや玉川ダムの現場見学に参加し気持ちがワクワクした。希望していた東北整備局に入って現在2年目。今は鳥海ダムの建設プロジェクトに関わっている。「新設のダム現場を経験できることがうれしい。技術者としてダム工事の仕事の流れを極めたい」と将来に思いをはせる。



三浦亘喜さん



佐藤涼斗さん



菅原慎也さん

「地元のために」全力で挑む技術者魂

地域建設業の底力を実感



石沢川での大型連節ブロック据付状況

秋田・山形豪雨　2024年7月24日から27日にかけ秋田、山形の両県を中心に強雨が降り続き、総雨量は子吉川上流で500㍉を超えた。秋田の子吉川流域は7カ所で堤防が決壊。山形の最上川流域も観測史上最高水位を記録し、堤崩れ、地滑りなどの土砂被害も60件以上発生した。

山形・最上川堤防損傷緊急復旧

24時間施工で道路と堤防早期復旧

チームワークで役割果たす

最前線で地域を守る使命を誇りに

24年7月24～26日の3日間にわたって降り続いた大雨で、山形県内を流れる最上川は中流域で堤防の一部が損傷した。県の内陸部と日本海沿岸を結ぶ国道47号は通行できなくなり、被災地の救援にも支障が出る状況だった。24時間体制で緊急復旧に対応した地元建設会社と東北整備局新庄河川、山形河国、仙台河国の合同施工監理チームの胸中には「一刻も早く道を通したい」という強い思いがあった。

新庄河川事務所最上南部流域治水出張所の我妻信也さんは、これまで何度か水害対応を経験してきた。「いざという時の流れは分かっている。冷静さは保てていたし、出張所内も混乱はなかったが、被災範囲が広く全体把握が難しかった」と当時を振り返る。主任監督員として「自らの目で現場を確認しながら必要な判断を下し迅速に指示する」ことに気を配ったそうだ。

柿崎工務所工事部工事課の梁瀬優理香主任技師も昼夜を問わない対応を迫られた。水位の上昇で自分が関わっていた「戸沢上流地区ほか河道掘削工事」も危険な状況に直面。重機や資機材を退避させ安全を確保した後、緊急復旧工事に対応できる準備を整えた。緊急対応は通常の工事と違い図面がない。技術者として経験、上司の知恵やアドバイスを頼りに「細かい調整や施工方法を主任監督官とタイムリーに打ち合わせ事態に対処した」という。

最上川左岸の蔵岡地区（戸沢村蔵岡）の緊急復旧には同社が保有する重機や資機材、新庄河川で備蓄していた資材をフル投入した。「事前の備えや準備ができていたため搬入搬出がスムーズにいった」と梁瀬さん。着手から約2週間で緊急復旧工事が完了した。協力会社も含め延べ349人の作業員が昼夜を忘れ作業に従事。チームワークで重要な役割を果たした。

「当時はやるしかなかった。時間を忘れるほどの状況だったが不思議と疲れは感じなかった」と話す我妻さんは、就職氷河期の1994年に建設省（現国土交通省）に入った。入省から30年余り、地域に寄り添い一つ一つ丁寧に築き上げたインフラが地域の生活を支えることが、仕事のモチベーション。「今まで一度も辞めたいと思ったことはない」と自らの歩みに胸を張る。

地元のインフラを整備して多くの人に使ってもらい、万が一の事態が起こった時には最前線に駆け付けて地域を守る。建設業の使命に誇りを持っている梁瀬さんが緊急復旧工事に関わったのは昨夏が初めてだった。混乱や戸惑いはあったが、それでも役割を果たせたと自負している。冷静さは保てていたし、出張所内も混乱はなかったが、被災範囲が広く全体把握が難しかった」と当時を振り返る。主任監督員として「自らの目で現場を確認しながら必要な判断を下し迅速に指示する」ことに気を配ったそうだ。

柿崎工務所工事部工事課の梁瀬優理香主任技師も昼夜を問わない対応を迫られた。水位の上昇で自分が関わっていた「戸沢上流地区ほか河道掘削工事」も危険な状況に直面。重機や資機材を退避させ安全を確保した後、緊急復旧工事に対応できる準備を整えた。緊急対応は通常の工事と違い図面がない。技術者として経験、上司の知恵やアドバイスを頼りに「細かい調整や施工方法を主任監督官とタイムリーに打ち合わせ事態に対処した」という。

最上川左岸の蔵岡地区（戸沢村蔵岡）の緊急復旧には同社が保有する重機や資機材、新庄河川で備蓄していた資材をフル投入した。「事前の備えや準備ができていたため搬入搬出がスムーズにいった」と梁瀬さん。着手から約2週間で緊急復旧工事が完了した。協力会社も含め延べ349人の作業員が昼夜を忘れ作業に従事。チームワークで重要な役割を果たした。

「当時はやるしかなかった。時間を忘れるほどの状況だったが不思議と疲れは感じなかった」と話す我妻さんは、就職氷河期の1994年に建設省（現国土交通省）に入った。入省から30年余り、地域に寄り添い一つ一つ丁寧に築き上げたインフラが地域の生活を支えることが、仕事のモチベーション。「今まで一度も辞めたいと思ったことはない」と自らの歩みに胸を張る。

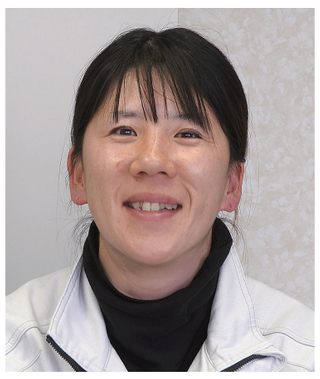
地元のインフラを整備して多くの人に使ってもらい、万が一の事態が起こった時には最前線に駆け付けて地域を守る。建設業の使命に誇りを持っている梁瀬さんが緊急復旧工事に関わったのは昨夏が初めてだった。混乱や戸惑いはあったが、それでも役割を果たせたと自負している。冷静さは保てていたし、出張所内も混乱はなかったが、被災範囲が広く全体把握が難しかった」と当時を振り返る。主任監督員として



緊急復旧概成時に、復旧に携わった方々との記念写真



我妻信也さん



梁瀬優理香さん



備蓄していた資材をフル投入し、昼夜を問わず緊急復旧を実施

岩手・一関遊水地整備

水門操作で大雨による冠水被害を事前防止

一関遊水地の整備は1947年に襲来したカスリン台風と翌年のアイオン台風の洪水を契機に計画され、1972年から事業が始まった。北上川の洪水ピーク流量を低減して下流部の氾濫を防止する洪水調節施設は着手から半世紀が経過。第１～３で構成し、周囲堤と小堤という二線堤方式を採用した遊水地は2023年度に水門が完成しており、事業全体の進捗率は約87％に達している。

岩手県中央部を北から南に流れ、宮城県東部の石巻市で追波湾に注ぐ北上川は県境に河幅が極端に狭くなる狭窄（きょうさく）部がある。その上流に位置する岩手県の一関市と平泉町の一帯はかつて水害の常襲エリアと言われていた。北上川治水の要として1972年に着手した一関遊水地事業では、1450㌶に達する広大なエリアに三つの遊水地を整備。周囲堤と小堤の二線堤方式で地域を洪水被害から守る。

各遊水地には大林、長島、舞川という三つの水門を順次整備してきた。洪水時には水門を閉め、小堤を越える川の水は遊水地にためて洪水調節効果を発揮。川の水位が低下したら水門を開けてためた水を川に戻す仕組みだ。

約10年にわたる水門整備が完了したのは23年度、24年度から操作が始まり、早速昨夏の7月と9月計3度にわたり、水門操作で農地の冠水被害を防ぐことができた。



設樂正登さん



半世紀にわたる遊水地事業、水門が初稼働

岩手河川国道事務所の設樂正登さんは大林水門にある操作室で水位を30分おきに確認しながら記録を取っていた。水門を閉める時には「ついにきたか」とボタンを押す指が震えたそうだ。事前のシミュレーションで操作方法を何度も確認し、問題はないと頭で分かっていた。だが、それでも実際に操作した時は「きちんと稼働するかどうか不安だった」。祈る思いで押した操作ボタン。ゆっくりと閉まっていく水門を見た時は、安堵（あんど）の思いがこみ上げた。水門が機能したことで収穫を控えた稲を守ることができた。「インフラが機能や効果を発揮する瞬間に立ち会えた」ことは貴重な財産にもなった。

遊水地事業は着手から半世紀を越え、先輩たちが地域と交流を深め熱い期待に応える形で進行してきた。大学で土木を学び、両親や恩師の勧めもあって国交省に入ることを決めた。入省して3年、「地域が喜ぶ仕事をし続けたい。コミュニケーション力をもっと磨いていきたい」としっかり前を向く。転勤も経験したが慣れない土地での生活は赴任先で新たな出会い、知らなかった文化や食が楽しめると、前向きに捉えている。

遊水地は防災・減災のインフラという側面だけではなく、人と人との交流や自然と触れ合う場所にもなっている。「水門のおかげで水害の影響もなく、ひとめぼれが無事収穫できた」と話すのは、いわて平泉農協（ＪＡいわて平泉）青年部の遠藤清行さんだ。生まれ育った一関市中里は「3年に1度は冠水する」とも言われる水害の頻発地。「水の怖さを知っているだけに物心ついたときから一関遊水地への期待があった」という。

昨夏の大雨で地域を被害から守った遊水地。大雨が降った後、「国交省ありがとう」とメッセージを記した看板を作った。地域の基幹産業は農業。地元生産者は地域の未来を守る重責を担っている。会社勤めから転身し家業の水田を継いだ阿部大輔さんは「ほ場整備ができ、環境が整ったことで就農を決めた」。佐藤義剛さんと佐藤一樹さんも小さい頃から遊水地で農業をすると心に決めていたそう。一関地方の稲作を担う若い世代には「将来、遊水地を荒れ地にはしたくない」という共通の思いがある。

一関遊水地で稲作を行う20～40代の世代は「日本一の農業」を目指し、一関研農同志会を設立した。地域を盛り立て、子どもたちに夢を見せる仕事を目指している。遊水地の整備で生まれた大規模ほ場を舞台にした挑戦は続く。

経験が財産 成長を決意



ＪＡいわて平泉一関青年部中里支部が「国交省ありがとう」のメッセージ看板を作成。（左から）佐藤一樹さん、遠藤清行さん、阿部大輔さん、佐藤義剛さん

取材協力／東北地方整備局河川部